

第24回小諸・藤村文学賞最優秀賞受賞作品

一般の部

水の手引き

埼玉県春日部市

高野千恵子

ふるさとはどこかと問われれば、私は佐原と答えている。佐原は、千葉県の北東部、利根川下流域に位置する香取市の一地名である。そこは、もとは佐原市だったのだが、二〇〇六年の市町村合併により、香取市になった。

市の名称が変わり、もう十年以上も経つのだが、いまだに香取市と呼ぶのに馴染めず、佐原で通している。近隣に、一八七八年から「香取郡」を冠する町々があり、少々紛らわしい気がするからだ。他に、「香取」の使い回し、二番煎じのよう、というのもある。

しかし本当の所は、私自身が佐原という呼名に、特別な愛着を持っているからに他ならない。佐原と口にするたびに、利根川や、市のあちこちを這う支流や水路の、あの泥濁りした灰緑色の水のゆったりとした流れと、水辺に暮らす、名前も知らないある人の言葉が、私の中にありありと再現されていく。そうして、水のある風景と共に、かつてそこにあった暮らしや温もりまでがよみがえり、胸の中はたちまち温かい光でいっぱいになる。透き通った懐かしさと思慕が、私の中に溢れ、ついには涙をこぼしそうにさえなるのだ。

中学三年の十一月のある日、仮病を使い、まんまと学校を早引けしたことがある。佐原の学校に転校して、間もない頃のことだった。

人気のない家に戻ると、私服に着替え、駅へと向かった。二つの

路線があるようだったが、行く先を確かめたところで、知らない土地に、見当のつけようもない。そこで行き当たりばったり、最初に到着した電車に乗り込んだ。ところがこの電車、全くの外れで、市街を抜けて利根川を渡ると、切株にひつじが萌えた田園の中を進んでいく。しばらくしてまた別の川を渡ったと思えば、再び田園での走行の繰り返りで、いよいよがっかりした。これ以上乗っていても、面白い場所には行きつくことはないだろうと諦め、高架にある無人駅「十二橋」^{じゅうにきょう}で降りた。

逃避行は結局、住んでいる市街地を抜け出し、辺境の地へと移動したに過ぎず、周りは何の変哲もない集落と田んぼが続くばかりだった。そのうち、自分がいる方向も分からなくなり、滅多矢鱈に歩き回っているうち、大きな川に突き当たった。よく見ると、その大きな川に流れ込む、随分と細い川がある。兩岸にはすれすれに立つ家々と、小さな橋がいくつも架かっているのが見渡せた。

——佐原って所は、どこまで行っても厄介で、濁った水があるばかりじゃないか。

市内には、さっき電車で渡った利根川、その支流の横利根川や小野川を始め、数多くの川や水路が縦横無尽に流れている。私にはこの川や水路、そこを流れる水がいまいました。これらは、人の行動を分断する障害にしか思えない。それはまるで、自分のうまくいかない先行きの暗示のようにも思え、ますますどうしても好きになれなかった。特にここなどは、細い川に阻まれて、橋までいちいち迂回しなければ、目の前の近所にも足が運べないのだ。佐原の中でも、最も不便を強いられた、あわれな場所に違いない。やるせなくなつた。しょんぼりと川を見ると、船が小さな波を受け、心もとなく揺れている。その船の揺らぎを見るときも見てみると、突然背後から大きな声がして驚いた。

「あれ、ここいらじゃあ見かけねえ娘だな」

振り向くと初老の女性が立っている。紺がすりの短衣にモンペ、手拭いの頬被りの上から編み笠を被り、両腕に黒の腕貫きという、

随分妙な格好をしている。その編み笠の奥から、怪しむような鋭い目つきでこちらを睨んでくる。すっかり気を抜いていたが、学校をサボっていたことを瞬時に思い出し、とんでもない大人に見つかってしまったという恐怖で体がすくんだ。お婆さんは、「こんな所でなにしてるだ」「一人でどっから来た」「学校はどうした」「親御さんは、知っていなさるんか」と、矢継ぎ早に私を問い質すが、緊張で舌までも震え、何も答えられない。

「だんまりか、最近の子供は頑固でしょうがねえ……。そうだ、そんじゃお婆ちゃんが、エンマさ連れてってやろか」

エンマと聞いて卒倒しそうになった。閻魔と思ったからだ。そこから想像を膨らませた私は、閻魔が悪者を懲らしめるところから、このお婆さんは、警察官を閻魔に例えているのだと思った。つまり、私を警察に引き渡す、という意味なのだと解釈した私は、ようやく、学校を仮病で早退した事を激しく後悔した。

「ごめんなさい、それだけはやめてください。お母さんには、絶対心配かけたくないんです」

観念しきれず、ついにめそめそしながら懇願をした。いきなり泣き出した私を、最初は呆れていたお婆さんだったが、私がエンマを閻魔のこと、そこから警察のことだと思っているのだとわかれると、大笑いをした。

「違う、違う。エンマとはこのことだ」

そう言って川を指さした。

「入り江の江と間と書いて江間って言う。この水路の事だ。ほれ、そこに船があるべ。お婆ちゃんはこのサツパ船の船頭をしてる」

そう言って私の背中を押し、船に乗るよう促した。川だと思っていたものは、水路だということはわかったが、お婆さんが、私を船に乗せようとする意図ははっきりしない。まだ、警察へ突き出されるのではないかという、恐ろしさは拭いきれなかったが、こうなるとお婆さんに従うほかないように思え、諦めて船に乗り込んだ。

お婆さんは、船の後部に立ち上がると、江間に、慣れた手つきで

掉さす。船はゆっくりと静かに、水面を滑り出した。

「昔はこの辺りはもっと水に囲まれていてな。農家は、田んぼにだって船がなければ行けなかった。だから女は、掉が上手く扱えなきゃ、嫁にも行けなかったよ。今じゃ田んぼに船は必要なくなったから、観光客相手の船頭だ」

観光船とわかり、更に気が滅入った。物見遊山気分など微塵もない。金がないから降ろして欲しいと言うと、お婆さんは、招待したのだから、金なんか要らんと一笑した。

「ところで、えらく暗い顔してたな。お前はどう見ても中学生だ。さて、なにがあった。それ、お婆ちゃんに話してみろや」

私は仕方なしに、最近両親が離婚し、母と佐原に来たことを明かした。お婆さんは掉を操るのを止めると、そりゃあ大変な思いをしたなあと、優しく、労わるような相槌を私に返した。思いがけず、見知らぬ人の親身な言葉に触れ、胸の中がじんわりと温かくなった。水に揺れる船も、なんとも言えず心地がいい。強張った気持ちが一気に解れ、今まで誰にも言えずにいた言葉が、思わず口をついて出た。

「本当は高校に進学したいんだけど、お金で迷惑かけるので、お母さんに言えないんです」

お婆さんは、そうか、そうだったのかとだけ言うと、あとは黙って船を進めていたが、やがて、「自分の気持ちを、ちゃんと母ちゃんに言え」と私に言い聞かせた。

「なあ、いいかい。ここいらの女はな、どんな生業だって、水と縁がある。子供のために、生きるために、男以上の力と勇気をつけろと水に鍛えられ、諭され、そしてずうっと慰められている。水は女の手引きなんだよ」

私には厄介ものにしか思えなかった水を、まるで肉親のように親しみ、愛しむ言葉に、この地に住む人の機微に触れた思いがした。

「お前の母ちゃんは、きっとお前のために強くなりここに來たんだ。水を手引きに男勝りになりたくて、ここに來たんだ。自分の子

供の望みを聞けぬほどの意気地なしじゃない」

船を降りると、おばさんは「お前も今日は江間に手引きされ、おばちゃんの所に来たんだなあ」としみじみと言って、私を見送った。

その日の夜、私は高校進学希望を、初めて母に打ち明けた。すると母は、迷うことなく「だったらお前のため、頑張るさ」と力強く言い、私の願いを聞き入れた。母のお陰で、私は高校進学を果たし、多くの友人にも恵まれ、充実した三年間を送った。そして卒業すると、希望を胸に上京し、佐原を後にした。

あれから四十年以上が過ぎたが、水と共にある佐原の風景はほとんど変わらない。変わったのは、市街を流れる小野川の両岸に並ぶ、古びて崩れかけた明治時代の商家の家々が再建され、重要伝統建造物として保存されるようになったくらいだろうか。小野川も石積みの護岸に化粧直しをし、柳の並木も植栽された。初夏を迎える頃には、柳がたおやかにその枝を風に揺らし、古風な町並みに風情を添えている。その小野川と柳に誘われ、和雑貨を商う商家の暖簾をくぐった時の事だ。

「大昔は、この辺の商家の旦那衆の中には、お大尽が結構いてね。花街に連夜入り浸り、豪勢に芸者遊びしていたって聞いています」

店番をしている大旦那は話好きらしい。平日の閑散とした店に入って来た私を、観光客と勘違いしたらしく、早速昔話でもてなした。「芸者の息子が実は異母兄弟だったと、いい年になってから偶然に分かったなんて話も結構あってね。私にも未知の異母兄弟がいるかもしれんて、息子と笑い合っているんですよ」

「へえ」と間抜けな合いの手を打って、すぐに後悔した。商家の奥さんも芸者さんも、私の母と同様、相当の覚悟を決めて、自分の子供を守り育てただろう。試練を乗り越える女性の、潔さや逞しさ、力強さが透けて見え、畏敬の念さえ覚える。女性達に敬意を払うなら、笑い種ではないと、軽率な自分を戒めた。

「ほら、小野川の岸に、観光船とは別の船着き場があるでしょう」

大旦那が、店の前の小野川の方に顔を向けた。川へと続く石の階

段の先に、朽ちかけたサッパ船が繋ぎ止められている。

「うちの大ばあさんが、自分が船に乗ってここに嫁に来たことを忘れたくないから、どうしても残してほしいって言ってね」

話を聞いていて、中学生の時に出会った、船頭のおばさんの言葉を思い出した。

「佐原の女性は、どんな生業でも水と深い縁があるからですよ。水は女性の力と勇気と、慰め、そして男勝りの手引きなんです」

大旦那は目を大きく瞬かせると、今度はがっかりしたように言った。

「なんだ、この者^{もん}もんかね。人が悪い」

「ええ、そう。佐原者^{さわらもん}です」

大旦那の愚痴^{ぐち}に、喜々として答えた。私が佐原で過ごしたのは三年だと知ったら、大旦那のように何代にも渡り、この地に根を張って来た御仁は、私を地元の者とは認めないだろうか。それでも、誰が何と言おうと、私は自分を佐原者だと強く自負している。

佐原の水と人は、私の迷った思春期を、豊かな情愛で包み、日の当たる場所へと導いてくれた。そうして佐原は私にとって、止むことのない追憶と郷愁を呼び起こす、特別で大切なふるさとと呼ぶ場所になったのだから。

(注) ひっじ……櫓、または稲孫と書く。ひこばえ、二番穂。稲刈りが終わった後の株に再生する稲のこと。